



1278
19

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之四

東都

曲亭主人編輯



中輯第二十七

瑠浦曲乃道人
田居中の女僧

當下廣光嗣忠ハ忙々々々歛め。義秀ハ左右ハつゝ。嗣忠四下ハ
眼配ハ廣光聲を低々絶て久久朝夷ぬ。去歲乃暮春小松
ゆ々端々別々々々。恩小感ハ義を慕ハ日々々々々々。今
とて忘々々々小々々々。送々々々。簾笠ハ月々々々。暫時雲隠れ々々。敵
躬方々判々々々。挑闘ハとせ々々。危々々々。苟且々々。西嶽何々々々。
編歴志々々々々。又々々々。比々々々。當國小々々々。尊體ハ々々々々。
圖々々々。再會々々。海月の骨々々々。心地々々。歡々言語小々々。難々々々。其々々

月夜日編卷四

侍る。壯俊ハ信夫。莊司元晴翁。羽小も。主君も。使つて。馬兼標吉郎
 嗣忠と呼ぶ。則同志の義士。心も。おれ。多の。もと。引合。て。六。嗣
 忠。も。恭。しく。額。をつ。れ。英名。譽。く。耳。小。真。く。三。郎。殿。と。知。ら。ざ。ま。ら。孤。鬼。の
 力。を。搦。ま。さ。し。漫。小。虎。威。を。犯。し。う。を。礼。を。許。さ。せ。め。う。と。勸。解。れ。ハ。義
 秀。も。ち。領。き。これ。も。近。属。この。地。小。才。も。足。下。の。義。勇。を。使。使。さ。う。三
 共。侶。夜。を。こ。そ。く。賊。柵。を。窺。ひ。決。定。め。て。欲。ま。る。所。あ。ら。ん。さ。う。れ。も。月
 下。小。集。令。く。時。候。移。さ。ば。遂。に。賊。徒。に。怪。め。ら。れ。ん。日。も。あ。ら。う。あり。て。
 今。宵。あ。ら。ぬ。徘徊。さ。ま。ま。ど。その。時。刻。尚。早。かり。霎。時。樹。蔭。に。退。り。て。送。り
 胸。臆。を。盡。ま。し。三。三。も。才。と。先。小。立。く。俣。小。口。と。一。町。許。叢。立。る。樹。下。小
 口。け。入。る。小。裡。面。小。小。中。あ。ら。う。堂。あ。ら。け。り。荒。果。る。戸。を。推。開。と。義。秀。其。が。又
 尻。を。懸。ま。さ。廣。光。と。嗣。忠。ハ。そ。が。左。右。ま。る。燈。籠。の。基。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。

石を床。几。小。う。え。く。う。ち。對。ひ。く。を。も。義。秀。月。を。仰。瞻。く。夜。ハ。も。中。あ。ら。う
 つ。た。ふ。こ。が。心。い。そ。り。を。益。の。雜。談。さ。う。も。先。こ。う。く。成。説。げ。れ。欽。れ。去
 歳。の。春。小。松。も。く。三。三。及。一。三。小。別。と。う。り。姿。を。更。變。を。窺。し。信。濃。園。小
 越。れ。近。江。路。以。遊。歴。し。一。ゆ。の。冠。者。を。索。ね。一。ゆ。の。日。が。養。母。巴。の。尼。小。あ。ふ
 この。あ。や。も。や。せ。ん。と。草。枕。旅。り。旅。小。日。を。弥。れ。ども。親。も。友。小。の。竟。よ
 得。あ。ら。う。當。時。又。あ。ら。う。冠。者。の。父。蒲。殿。ハ。平。家。を。西。海。小。討。し。四。國
 九。州。小。年。月。を。累。ね。り。然。れ。ハ。彼。地。小。恩。顧。の。も。是。か。と。ま。さ。う。と。冠。者。ハ
 ま。さ。心。當。に。遠。く。西。國。へ。走。り。て。欽。北。で。遭。ね。西。で。逢。へ。西。で。あ。ら。う
 東。欽。南。欽。漢。天。竺。を。あ。ら。う。と。も。や。六。十。餘。國。を。遺。ち。巡。る。遭。ま。し。の。と
 あ。ら。う。と。心。い。小。け。ま。足。小。信。し。く。潜。び。く。華。洛。を。過。り。盧。が。散。る。浪。速
 津。り。衣。縫。ハ。針。磨。深。吉。備。の。中。山。ち。う。く。小。い。や。め。づ。し。海。山。の。名。所。舊。迹

珪浦すゐのうら
義秀よしのぶ
榎道えのちみち人ひと
又また浮うき
あみ



浮榎道人

小も心とちりて四國小渡り。筑紫と赴れ西九箇國を編歴せ。日肥前國
 珪浦のちりて小く浮槎道人と名ふ一老翁。遊歴し渠へ岡田冠者親義が
 庶兄小倍田二郎在義といふのちりて木曾殿近江の粟津野ゆき夏
 あやし比在義も亦罪を鎌倉小得と鎮西へ出奔し高船又便船と
 海外ちりて國を巡歴せしと數年ありて歸朝せしめるとバ萬國の地
 理を推究めし虫語を通曉ししとりの義秀去歲の秋の比砥並俱
 利迦羅谷の邊より彼人の弟岡田親義が遊魂と問答しと。その白骨を
 瘞しとあやしとあやしのちりて成生る小及びく道人感涙を堰あむ只管これ成
 其小留めく昔を語り今を論じ且その經歷し外國の風土物産のゆひ
 さまは説示せしと精細ちりてこと同学せんぬ小ちりて杖を駐る程小経
 任誅伐のちりてとん時夏が賊中走ししと。足利左典厩敗軍のときも

遙小西小竹のちりて人の噂も七十五日過て吾侪の春ちりて今茲正月の初
 ちりて吾黨恩赦のちりて街衢小櫛を掛らとこれと歡くちりて彼時
 夏が奸惡度覺と義知赦とあひとん必故郷へ還ちりて今ま
 外小求人よりと下野へとちりてとちりて躬ちりて浮槎道人ふりて成生る
 別とちりてその月の望の比歸東の杖をのちりて二月の廿日あやし。華洛ちりて
 又ちりて小奥六郡の賊乱超過しと信夫莊司の戦歿しと。督冠者義知
 夫婦の賊徒の為小生擒とちりてその戦へ如此とちりて箇様と風刺と
 ちりて小ちりて吉見冠者の奥の信夫小身を寓とちりて。僅小知しとちりて
 甲斐ちりて。獨は感と堪とちりて猶も虚実成探とん為とちりて。華洛と立
 ちりて若狭より越路へ赴れ急ぐとちりて日ちりて経とちりて。二月の中野の
 陸奥小ちりてとんとちりて鎌倉より軍勢下向し。賀藏人光仲駿河前

司廣綱兩大将とて再々経任を討せしむ。廣綱の名ハ豫てよりあり。先仲のつら定るるをねむる人小直成向の不知る者あり。答云云。廣綱の背ぬく。此度追伐の惣大将とてこの人初乃姓名も温子井平と呼ぶ。下司のあやまりと使人の虚言ゆへあつた。人の僥幸。廣綱の和漢今昔珍しきを驚くべし。彼井平ハ冠者を捨て獨り。栄利小走。一秋交遊の義信孰ふ。あは憎む。親むべし。あつをのり。先仲と井平も同人あつた。瓜知も。その陣門へ。さびも音つとせむ。この地は身を潜め。その軍略を。渠が龍蛇茂林の戦の小暴道時夏と敷。走。鎮守府の城と攻取。平泉の柵を攻んと。泉川の上。経任。肩。更。大軍を追ひ走。進。柵を圍。

速小攻。徒小日を過。程小士卒。時疲。病死。少。且。兵糧。渠。瓜。他。冠者。功。負。今宵。柵。中。小。潜。入。友。甲。夜。内。室。医。姫。和。殿。達。小。環。會。意。外。の。歡。ひ。奇。ら。妙。も。三。二。月。の。上。旬。主。の。使。を。弄。

録倉へ起つり又嗣忠へは為小越の稻向許赴る主の先途小あつと
 P。そのるの故あつと巨細小傳ゆふり。余後のるのゆふと。因
 廣光床几をもち度既よと。其の二月。録倉へ使せり小
 冠者の外戚足立盛長ぬふぬ。正月下つる小勇まる。その子息
 景盛ぬふ内室のるゆふ。君の御氣色を蒙す。龍居の折るれが
 密旨をP入る小うあ。その程小奥の凶変ゆふ。慌忙立
 之。館へあつと。焼亡とぬ。その人この白骨成の
 とめ。送恨かう。大履の既小類と。孤匠の興と死小
 あ。冠者も。籠姫も。賊柵よ存命あ。小聊慰め。と
 彼此小立あ。豹形村のほり。標吉郎嗣忠が越。わか
 まつ。逢ぬ主の先途よあ。憾を送小説盡しく。竊小興復乃

大義を相譚。程小賊徒誅伐の録倉勢。や當國小来著せ。と
 摠大将光仲も。舊名井平と。風聲をゆめ。渠が立身。と
 得。去歳の春下野。冠者小俱。北國へ走。折中途小
 仇を防。要時冠者小後。加賀へ。廣綱ぬ。乃
 誓小。その後。東へ赴。かれ。是不義
 の友あり。縦豫讓が。不義の人。後。と。これの
 あ。嗣忠も亦同意あり。只この二人が微力を盡。主君夫婦を救ん
 と。賊徒の隙を窺ふ。彼。港の。要害を。用心
 等。閑。灰。歩。浅瀬の。彼。加北。乃小松
 つ。和君。環。小。籠姫。又救。小。加北。乃小松
 の。野。受。再生の。思。倍。欵。百萬騎の。躬。方。を。ぬ。

再會の歡しと自他の物々々々言ふ言ふくく見参不暇あり今宵
 俄頃の隱宅を近死にさうさうさうさうと問は義秀含咲と煙のさうさ
 中らる今宵見参せられむとこと既に小人を傳く安居の里へ送り
 けれハ蜂蝎も刺さるさうさうさう然ハその所以を説喝さんさう廿町
 あまらさう片田舎小いことびら草菴ありあつた老る尼あつた只ひとり
 らん住さうけあさうさうさう日小彼知を過さう柴門を敲る進まへり
 湯を乞ひ小いと叮嚀小歎待さう挙動賤かさむ由緒ある人の幸さう
 たる果欬と推さうさうさうが養母のさう胸小浮さう不信の信成起さう
 たる素姓を問ひ小渠へ秀衡が時平泉の柵小置さう某甲が女
 たる泰衡滅亡せしとれその父も戦死さう親の菩提を吊ん為小祝
 髪入道せしとれさうさうさう衣川さう義経始終のる篋姫のる進も

よく知れ今この経任を悪むと鬼畜さう甚しこの後さう又西之度彼
 ほり成過る毎小尼の安否訊ね小尼も一枚の繪圖を披たる義秀小
 示さるのさうさう平泉の柵の全圖さう親の記さうさう
 為小要さる力のえ抑平泉の柵ハ文治小破却せさう且一紙経任修復して
 さう抑さうかれハ文治の古圖とさう今と大さう違さう又彼柵
 の後関さう厨川へ通る捷徑ありその路ハ云云なると叮嚀小指圖さう
 君り用ひのさうさう進せんといさうさうさうさう受納め
 さうさう彼知の案内さう智を用ひさうさう知れ只小尼のさうさう信夫
 莊司が戦歿乃為体三二ハ玄歳の秋金瘡愈さうさうの地小すさうさう
 さうさう冠者小環會さう馬養標吉が仇敵のる且その鎌倉と山石上へ
 使せさうさうさう知れ説示さう浮世小遠く小籠居て知れ

人の心成さへよく知るのち故にそあふめ偽成りく俗に詣ひ奥を催そ
 りのちと名のみく疑ざるをたかく今宵和殿達小環會より成
 實けられ彼女僧が言ひゆく信あり千里眼を得るの飲順風耳と云
 力の牧亦是不思議の人と云ふべし。さきハ亦きの泉川のこゝに
 谷も藁二郎が下野より来りて小あひぬ渠へ去歳の春の季小箱向許
 辞し去り赤貝へ還りて二二とよく知りつめ。こゝに此度初て使
 現彼藁二匹夫あるとともその忠心も世の人の及ぶ所あり渠も亦その
 故主の賊徒小擲れと云ふと竹のく敬篤に歎くと大なるを備給脱れ
 去りその骨ありとも拾んとく今暇なき耕作を人小任り只ひとり路次
 しりてとあるといふ。そとにも冠者の物各せど難し臨み銀あり渠
 小も領取せしる恵を忘れぬ由あると云ふとさか人ハヨクくわたりこれ

亦その愚直小愛つ旅宿小伴の機密を告り用ふるもあらん
 とく今宵も竊よおとすつは蓮姫を藁二郎が背小負りてのちを
 尼が弁へとく遣やぬかとも懸念せどもあはちかく大功を立よといふ
 智術を感する西義士も名も膝うち敲れ更かの如くあふ既よ不
 測の助けあり皆是姫の洪福ありさかみくも柵中へ潜び入る樹ぞあらん
 雲まほと再び問ハ義秀へ懐くを彼繪圖をさし出さ月下小うら
 披見西士まづよくこゝに成見よこの処を獄舎ありさ小城内あり館舎
 あり先は冠者を救ひ出さ後小経任を頼むと云ふ。日よ安房の海辺にて
 人と形りぬる甲斐ありき水煉へ人よ譲らむと彼むらさきの散斬士ハ水底
 ゆくも易かりと云ふと西士の為よ蓮姫の渡りたる監工を穴九見の
 ちよ最良よと釣索とく岸小引著け石小撃りて囚とさされ彼監のく

へ。その餘のりも如此くある固様と説論せば廣光嗣忠やましく
 勇ましく共侶小その繪圖をこの武略ゆき後ひ多折もあれ遠き
 寺院の鐘声又香くと告ぐこと此の義秀耳を側くと是れ豫て計る
 所今宵丑乙の比及小柵又潜び入るとあり。いとも短夜夏の夜小長
 物語時を殺しと既よなる時刻小多しぬ西士乃軽く打合せよこれ
 甲夜までこの知小木の樹立あると我知ましくこの堂あゆをまごり
 小圖らども足を休めくことこれ談合谷を得たり祭る神牧佛欽
 と頭を回し透りあめてうち敬馬とく堂我鳴りて霎時黙禱し退りて
 又左右を足えり西士のいまあまを足げやこの堂のく荒くとも本
 尊へ不動明王もこと安房小を生れ養父の雙言を敷んとく壯
 司殿の不動堂小夜をすめんとく人を遂にう後又加北へいれりかふ小

砥並山を越るとく俱利伽羅山小なるもあく岡田親義がヨ火の為小との
 怨敵を鎮めりあま今宵又この不動堂小同志の両義士と會合し
 友の為小仇を敷んと欲と既小の是之びの感応今亦空りかづればや
 加旃俱利伽羅山なる不動堂は通夜せりと假寐の夢の中小これと
 養母と一三と送小あま白骨を霎時争ひて為体嚮小三標吉と知
 らく挑み小相似とく彼へ夢寐の妄想も是は不測の再會あり
 一虚一實神明佛陀の孝友を慰め諭を致かまふ又養母小も還り
 あふ日のあまもどや只あひさる亡母の像見小送をを價の重宝俱利
 伽羅丸の一刀も魔鬼を鎮め妖を攘ふ切あわゆる小あゆえあり
 術よく風を起し雲小乗るとも頭打落しとく是れと勢ひ龍で抜き
 尖ちり鐔除ちてうち目成り又うち目成る夏も寒死刃の光り孰を月と

見るともふ肉をこころとく日光とくさるる廣光嗣忠ホこの名刀と感ふ
 耳を澄し目を驚しく共侶又嘆賞一齊一堂内小進を向ひく志願の音は
 黙禱を當下義秀ハカを刀を腰小ちさめく廣光ホと心そがけの
 塹端小近つれく又西人小耳語示しこが為まが索又携り下りて
 の内小入る左右の膝ハ外又餘りて全身蓋り大なるまどといと輕け
 めく坐さとも沈まき廣光ハこも成んく嗣忠と目をありむり坂上天宿
 祢田村九ハ身の重くと二百斤輕れとさる六十四斤動靜機小合し輕重意小
 任しと怒と眼を回さると猛獸も忽地散れと咲く眉を舒ると
 稚子も早懐しといく又こ今義秀もさる儔者勇士やそと密語ハ
 點頭つ共小感嘆さうけるかく義秀ハ盃の縁小鈎索をうち掛り
 竿を掃りて溝門の脚より漕入るる
 向の岸なる石磴又登りて別は

一條の鈎索を解ゆと楚と盃小懸るち掛け初の索を引動せ廣光
 ホもその意成ゆるとさるふとさる索を引徐よす成る縁と及ぶ
 盃ハ舊の岸小本たり第二番の廣光とさる索小携りて岸を下り
 盃小入ると義秀の所作小做り果る初の如く向の索を動せ
 義秀躬く引せりかくて廣光ハ竿を挿ふ及ぶとを溝門の
 内小入ぬ第三番小嗣忠渡りそのまる所義秀廣光の如く既渡り
 果る義秀ハ兩條の索水中小投沈め盃を石小打當て碎とこ
 をも捨けり廣光嗣忠驚れく竊小その故と向る義秀うち含笑
 くと西士とさるる吾們今この柵中小入ると冠者を救ひ怪
 任を殺すとさるる吾黨一の城戸よりゆんとも二の城戸より入ん
 ともさの隨るる又又笑を盃を用ひんや渡り果る盃を碎れへ

古人船を沈むの徒意。さるる多し。と密語。廣光も嗣忠もその
 膽勇不感服せり。折を柵外。又戦ひあはるとも。鯨波遙小。使え
 賊兵大。一二の城門。小聚合けん。小入氣。さるる。義
 秀先。小立。獄舎の。義邦の。繫れ。小寝も
 難。傷。小守屋あり。裏面。賊卒。西三人。以。小棒を
 守。義士。小穴。怪。と。認。小
 引提。走。知。廣光。嗣忠。立。塞。門。邊。二人。を。破。小
 残。一人。驚。小。潜。出。逃。小。声。を。揚。と。程。小。嗣忠
 追。蒐。撃。留。その。間。義。秀。獄。舎。の。鎖。と。採。義。邦。と。扶。出
 せ。廣。光。嗣。忠。進。月。影。小。言。葉。多。共。侶。小
 涙。さ。む。義。邦。の。心。を。誰。と

関。軍。兵。夥。籠。旗。の。小。義。邦。主。従。命。め
 再。會。の。意。中。を。出。廣。光。の。西。刀。の。一。刀。と。小
 義。邦。進。小。樹。の。小。義。邦。と
 廣。光。と。遮。与。抑。この。獄。舎。の。邊。左。右。小。土。堤。あり。後。林。あり。軒。稍
 盡。知。の。入。況。曉。比。賊。徒。の。柵。外。小。打。出
 寄。と。戦。小。中。を。知。の。廣。光。の。要。時。主。乃
 義。秀。の。嗣。忠。小。准。備。の。火。薬。と。分。と。彼。此。小。火。を。放。林。の中。を
 倅。兵。ホ。その。煙。を。望。暗。號。を。違。竹。を。糸。木。を。動。鯨。波。を。揚。う。

中輯第二十八

- 一二 関乃 攻鼓
- 四 孝子の 怨刃

これより先城戸四郎武詮ハその夜四更の比及小十四輛の兵糧車を隊兵
三十名小推せり。潛中なる体あり。水草太郎五が陣門へ牽入る如近
つれ多。この時平泉の柵より遠見の賊兵ホもやこれをとんと。一の城門を
守る。珍浦五十五六小答ふけは。五十五六あるは。外へ原
寄心の兵糧竭く。あは外へ求め。彼れ食ふ飽と。馬方
為小害あらん。いで踢散ら。と。ま。と。敷圍あ。と。歩率とりて。徑任
報知らせ。城門を颯と開。馬を真先小乗出せ。その隊の賊兵三
百餘騎。葛直小走。勢ひ群虎の羊を。相争ふ。異な。と。
水草太郎五が陣門を横筋違小推隔く。突然。と。競ひ。蒐。と。
武詮ホも謀。如く。須臾も柱。と。車を捨て。逃。と。時小陣門
の内。金鼓大。起。水草太郎五。之。百五十騎を。殺。と。出。賊軍と

推隔く車を引入。と。當下賊將五十五六。二百餘騎を二隊。と。
引。と。その半。と。車を奪。と。昌之。一軍を。避。と。留。と。
突崩。と。昌之。百五十騎。立。と。足。と。も。偽。と。負。と。陣門。成。と。望。と。退。と。
三。及。と。なる。追。と。捨。と。り。その間。小。一隊。の賊徒。ハ。武詮。ホ。を。打。散。と。し。既。と。
車を奪。と。ひ。と。五十五六。と。は。成。と。推。と。させ。と。柵。小。と。入。と。ん。と。程。小。昌
之。と。又。と。士卒。を。進。と。め。と。追。と。携。と。り。跟。と。入。と。ん。と。追。と。へ。賊徒。ハ。取。と。
返。と。り。撃。と。靡。と。け。と。引。と。く。昌。之。再。と。び。逃。と。走。と。り。又。寄。と。心の。本。陣。小
鯨。波。と。大。と。度。と。で。摠。大。將。賀。光。仲。佐。味。下。河。邊。を。左。右。小。備。と。
百餘騎。を。魚。鱗。と。立。と。し。徐。と。と。う。ち。と。賊。徒。も。亦。と。これ。を。見。と。て。
吠。又。と。百騎。の。賊。兵。を。繰。と。出。と。し。珍。浦。五。十。五。六。を。翼。と。け。と。車。を。城。門。小
引。と。入。と。し。寄。と。心の。陣。より。柵。を。と。り。僅。小。三。四。町。と。あり。光。仲。ハ。柵。中。と。

走り遠く衆賊齊一驚駭をく。原来瘴者。是賊留人と推隔立果り。彼ら此くと混雜しく。同士撃をりしけ。彼十個の勇卒へ武詮小力を勦く。或へ進み或へ退死或へ頭を或へ隠し千変萬化乃術成盡ま。あつく必死の大刀風。賊徒のいづく辟易しく。撃りけの敷をさる。さかき五十六吠又へ一二の城門を鎖固めて八方小眼を配り。麾うち揮り進退せり。これゆり賊の大勢稍武詮ホを認め。十隔廿重小を困と。追詰り攻り。武詮弥高小を本と。五十六吠も吠又。ゆも竟小近つと。或るむ士卒の残りを戦殺し。さる程は既小浅疾を負ぬ。縦項羽が勇あまると脱るべくもあらず。面小鮮血を込たり。死骸の上小伏累り。陽没るを居るをける。さる程は光仲も一の城門小推し。武詮が暗晝を俟小。忽然と後の方より馬埃月を

是則別人あまむ。賊將鬼六猛虎之七百餘騎を二隊小備へ。東の城門より推出し。その一隊二百騎と。さる障營小留り守る。寄りの壓り。遠く後方小備へさせ。さる方へ四百餘騎を。光仲を撃ん。塹を遠り。近つたり。光仲遙小。或ん。さるも驚嘆。原来は謀就と。武詮ホも。替れけん。賊徒を。後を影ぬ。前より亦撃り。出さる。あ。脱る。柵より敵の。疾撃を散り。退けとせ。く備を立更せ。高吉昌之士卒を進め。箭を射ち。刃をま。賊軍の真中を推通んと。戦み程。五十六吠又。衆賊を引卒て。城門を颯と推し。仲の旗。さる。咄と。晝く突。蒐ま。寄り。前後小敵。受て。靡。撃り。少。ま。けれ。高利へ柵。と。敵と。推へ。

且く挑戦ふおもふ。素立しる瘴ちる。頻ふ乱まき。備をさる。後陣のく。ゆへ鬼六が一軍よ。ゆへゆへ。亂れぬ。謀合し。攻め。水草下河。一隊の軍兵。ゆへゆへ。又光仲とひとり。小あや。賊徒。ま。捷ふ乗。駐立。撃んと。され。義。仗。恥。知る。寄。の。士卒。豫て。今。最期の軍。ゆへ。射。突。も。撓。ま。去。引。組。刺。推。伏。せ。推。伏。せ。頭。を。取。る。取。る。あ。り。の。も。烈。く。戦。う。賊。徒。ハ。マ。勢。の。り。あ。れ。新。隊。を。入。推。包。光。仲。を。撃。ん。前。後。方。競。て。蒐。光。仲。ハ。弓。馬。受。遣。違。馬。と。巴。の。字。小。乗。遠。く。近。敵。を。切。拂。大。將。既。ふ。か。の。如。し。士。卒。ハ。苦。戦。せ。る。も。先。途。と。防。げ。ど。入。替。る。兵。を。折。を。勢。ハ。穴。躬。又。替。る。

少くも脱るべくもあらず。光仲ハ。熱。小。賊。の。ゆ。み。か。らん。透。も。あ。馬。上。腹。を。切。ん。上。帯。を。折。掛。んと。折。多。柵。中。小。猛。火。燃。度。て。火。燄。四。方。小。散。乱。鯨。波。遙。く。渡。る。あ。ら。素。肌。武。者。身。長。九。六。尺。許。金。剛。力。士。の。暴。如。く。大。刀。を。真。額。に。抜。鬚。獄。舎。の。走。り。走。り。古。見。冠。者。義。邦。本。と。断。金。の。友。垣。結。ひ。朝。夷。三。郎。義。秀。の。小。あ。経。任。呼。け。二。の。城。門。に。聚。合。る。賊。兵。大。真。中。へ。雷。霆。の。落。る。如。く。真。一。丈。字。小。走。入。破。仆。踏。殺。を。力。量。早。技。萬。丈。も。前。を。瞬。間。に。數。十。人。の。首。地。上。に。散。乱。骸。へ。彼。此。に。横。に。投。る。真。木。小。彷彿。の。る。義。秀。小。後。の。鋒。を。雷。電。の。如。く。閃。閃。駭。馬。騷。ぐ。賊。兵。を。數。突。伏。せ。散。せ。義。邦。も。亦。廣。光。共。侶。走。り。出。る。名。乗。け。の。奮。戦。突。戦。を。

遙あるこの林の中へ三四十人の囚兵木竹を系し樹を動し鯨波を揚
 ぐり小曉の風烈しく兵火の勢の甚しく是首の守屋彼首の築垣敵とあり
 燃上り敵射方の際をゆゆりさるる二の城門成の賊兵亦いしく敵死
 ちとく懸とこ柵内は敵あり天よりや降りえ又地より涌りえ外は
 外よと叫びく山壁とく推合衝倒さ踏れ死するも多かきとされば又
 城戸四郎武詮ハ陽殺す必死を脱し折れくん敵とく出んとく且く透を
 窺へ程小賊將五十六吠又ホも既ハ柵外は出んとく一の城門を固め
 賊兵内にもえさるる車小近つともゆゆりさるる御方の勝負いふあんと獨
 ちの成苦しめ折れく柵を火攻し肉より御方を援るあり二の城門は
 賊兵亦ハこまが為小敵散さ火燄頻に飛遠り一の城門の塙城は牽
 捨り車中もその火殺す葛葉裏の火葉茂突走りその辺に賊卒ハ

面を焦し足を焼く矢庭小死するの多し衆賊こも駭死處と不
 覚は城門を開け皆外面へ出んと武詮これハ力を尽し岸破と起
 血刃うち揮り煙の下殺し廻り度度失の賊兵亦ハ敵一人と名ひもけぞい
 けは系とく凶とく蹴りぬる朋小踏れ後々あり武詮が又命と預り
 かす程小柵外は賊徒ハ件の変小駭き原来野心のあり肉より火を
 放し攻りや内外は敵を受てかろり且退死後ゆと敵を移め火
 をも滅さめ退けやくと相喚叫ぶ勢ハ更小くめ小似む勝誇り氣屈
 撃も果と死敵を捨り退き入んとさる程小内より遠く出る射方を送り
 敵とく僻認し退くめ城門はゆるぎもゆるめハ進め又同士敵ハ
 けは寄る枯稿の雨は活死轍魚の水を獲り亦何を異さる死光
 仲ハ目之く神井鬼六を逆撃せ高利高吉共侶小忽地備を立る

退難。賊兵の後方より推菟く拵切ゆをまきりける。當下五十六吠又を
躬方を退らせん為ふ斬土梁に馬を駐めく。近づく敵を切拂ひ要時ハ柱より
けきども寄ひの大刃風尖しくかきふべくもあらず。バ吠又ハ怪しく纏つて牽
久。城門ハ入るとさる如内ハ俟て武詮ガ双小馬の脚を拂と真逆さるふ
落し。佐味高利ハあまんて飛ぶが似く小馬を進めく起んとさる衣起しも豆を
薙カをとり伸く。細頸丁と打落せ。珍浦五十六吠久く敬鳥死かそれと。
柵ハゆるぎを透を穴規の鬼六と一隊はあんとほる程下河辺高吉ハ賊將と
んてけきバ矢度ハ馬と馳よせく。五十六小引組く。操伏んと挑まん。こは彼
鐘を踏外。西馬が間ハ撞と落て上あり又下あり。且くハ挽合ハ高吉竟ハ
乗一懸く。押して頸を取らける。さきハこの一の城門のわきハ柱。賊兵あり
ゆきハ先仲ハ又更ハ経任を撃取んとく。煙を犯し。士卒を進めく。柵中に

騎入り。その中ハ水草太郎五昌ハ之ハ斬を距ると一町許。小六十餘騎をのり。
神井鬼六猛虎ガ四百餘騎ハ駈向ハ面も焔を衝くと入る。寡兵あれども勇
あ。賊徒ハ三勢ある物々。既ハ柵を火攻せとく。且五十六吠又ハ一軍
い。撃破らと。又彼寄ひの陣營の堅ふとく備方。三百騎の同類も。退死
失。皆十二分の鬼胎を抱えく。戦んとほるゆめハ多く忽地ハ衝崩され。移り
あ。逃るあり。寄ひハ只管追撃し。或ハ生拘り。或ハ移。留る漏さ。追菟り。
當下賊將鬼六ハ逃る躬方を罵辱めく。返せくと呼まども。後ふべくもあらず。
共小馬を牽回し。退死走んとさる程。小水草昌之倍と。言奴ハ鬼面ハ
兜あり。且その耳隱ハ神鬼の二字を識者ハ。必鬼六。あんとそハハ精
馬ハ拍。兎賊鬼六何処へと。逃るとも。因さん。月某の日。口澤の
は。あ。汝ガ為小敷。水草十郎。目甫。一子。太郎五昌。之。ハ。ハ。

君父の雙敵やも漏まらぬ刃と受すと呼子く振肉を薙刀の雲間を穿る秋の
 月の水ふらんまき流る似く透もあせむと撥刃尖をのめくやと鬼六の巨刀と
 のて受とめ引けつ入里拂へ沈み一上二下とうち合さる刀尖より火花を散り
 卒合あまり戦やう鬼六へ賊中ゆき大剛ののりまけき敵の弱武者なるを
 見て出及ふ懸く打大刀尖く掛声ささる材狼の人を啖んとる勢ひあり昌
 之今茲ハ十七歳尚幾冠の齡あると武藝勇悍親は倍と進退恰も倍
 羅摩野雞の蛇を征まる術ありとされ數度の苦戦ゆりも器械乏小疲勞れ
 けん薙刀の柄ハ幾毀と折り大刀を抜く小暇あるまば残る柄をりく受をう受
 ちがや戦ハ光景いとも危く見えたりけり又城戸四郎武詮ハ一の城門の
 内外まて賊徒を夥戦ひ取の斬の橋の高欄小身を倚り少選息を吐く程ふ
 ころんとハ遙ろあるまき水草太郎五昌之と賊將神井鬼六と尺二騎挑み戦ひ

つ昌之危く見えたり吐嗟と進む足邊は賊兵ホが遺りうら箭を取て走り
 近づれり引く標と幾せが寛違を鬼六が眉間を管比深く礮と射る灸所
 の痛も小雲時も堪む馬より控と輾落まれば目之透さぞ馬乗放て怨の
 刃抜くもとせむ頭を死切てさう揚り現今曉の戦ひ小城戸水草の両
 勇士六萬死をゆく賊軍を殺靡け遂に神井鬼六を相敵りて父兄の怨を
 雪めり武運愛され仕伎多し人まか後も感得ける案下某生再説士曰
 見冠者義邦ハ義秀と共に進む賊徒を替んと迅りく廣光の後方より
 主の袂を引とめ劍戟をりく敵を撃分捕切各せん志とこの日は是士卒
 の所為よまき大将の希ふべなる小あを且君ハ久く摺摺の中小勇を論
 めく氣力衰へむひけん況又素肌ぬ軍馬の射とんと願ふを殆く廣光
 君の名代とて隨分働れり目と敵小あさるり匹夫の勇小做ひぬ



神井鬼六

五ノ四ノ五

城ノ四ノ四



所を異し
一之四子
怨を報ふ

草言四ノ四

水草大

後悔其所立く。且く心ひぬ。と叮嚀し諫止め。身ハ器械引提
又賊軍は走向ひぬ不題。刀野太郎時夏ハ文字掲暴道亦を殺し。奸計を人ふ。風聞大々。竊小鬼胎と抱。逃去ん
と。鬼六が隊卒。守り。これハ竟。便成。此の
柵を義秀。火攻せ。柵兵内外。敗北。或ハ亦前後乃
城門より。逃去る。時夏ハ敬馬。いふ。せま。と。再ハ
思ハ。時の難義ハ。結句。日。幸。夏。の。紛。脱。れ。ん。と。刀。を。腰。ふ。さ。し。く。由。く。
里を何処と。定む。俄頃。旅の。準備。賊卒。中。雜。後。関。より。逃
兵火の光り。賊徒。を。中。時。夏。ハ。天。の。祐。と。雀。躍。し。く。
衝。短。鋒。を。小。腋。引。著。け。外。面。遙。は。追。蒐。更。は。前。面。を。入。こ。こ。を。十三

日の月傾。漸西山。秦火の光り。脱れ。賊兵。ハ
才。彼。此。散。乱。時。夏。ハ。只。一。を。嚮。を。北。五。六。反。走。り。過。ん。と。程。義。知。其
喘。道。の。近。づ。く。声。を。あ。り。立。反。賊。時。夏。且。く。等。と。喚。出。ら。ま。う。ち。警。馬。後
方。遙。ハ。回。顧。ふ。これ。と。追。ふ。の。義。知。之。ま。ど。外。ハ。又。續。く。兵。あ。ら。ざ。れ。バ。
這。奴。い。つ。む。る。の。ま。ど。走。る。も。あ。り。ふ。所。為。あ。り。只。一。刀。ハ。結。果。之。
去年。来。の。熱。腸。を。冷。ん。と。漫。々。の。侮。り。之。榛。の。弱。木。を。小。楮。ふ。り。て。刀。を。引
抜。立。し。り。ける。當。下。義。知。此。も。擬。議。せ。ず。短。鋒。成。肉。り。と。取。直。し。く。
足。場。程。一。く。立。向。ひ。か。を。時。夏。昔。を。以。て。親。刀。野。僚。杖。照。時。ハ。非。道。の
矢。尖。小。母。を。喪。ひ。これ。ハ。又。汝。が。為。に。是。実。の。罪。人。と。ま。る。ま。そ。ふ。家。を。喪。ひ。友。を
苦。め。老。黨。ふ。さ。離。別。せ。し。怨。今。ま。あ。り。由。及。ぶ。照。時。ハ。枉。死。之。復。を
由。ち。母。の。讒。言。天。運。ま。く。小。楮。環。一。く。汝。を。殺。べ。亡。母。の。灵。を。聊。慰。む。べ。く。こ。ろ

會替の恥を雪ん終小脱とぬ天の網冥罰多ひとぞと罵責成せんと
 呵くと冷笑ひ物とけ小追鬼来ぬる誰とぞんと心ひ小過世の業を減
 るとや死そのあひ一吉見義邦彼修汝を送一置くこの地を去んへ
 足を送憾れ限る小獄舎を去くと死小まづる軟振落てられん
 念仏せよと喟たよ喟と片ひちぢり小丁と敷の刃を鋒りく受留め透間
 せぬ突出を鋒頭を避く丁と幾石と打合一又衝掛るいとも烈死刀尖より
 幾と散る火も餘と見ゆ兵火の光り天小満る昏よりもあは明るれ戦ふ
 人も人影もいづと際るれ生死の海とこるまを幾遍うかあせく返一必とく
 又打ひく立騒ぐあ波あらぬ白刃と白刃のまご勝負を判ざれ義邦ハ
 春の比より久しと層所小身を屈しる未漸小衰くと文系くく空出を短
 鋒をまぶく反久とと運歩踉蹌小入え小たり浩知は藁二郎ハ義秀義

邦のいのとさう。ゆりあけつゆあまんその曉がふ籠姫と菴のあふふり泣苦と
 平泉の柵小赴げ兵火頻々天を焦く。柵の内外小敵御方の戦ひ央るん
 とと心まをく安らぬも矢石を犯し今其知人人を訪るれ
 只柵外を彼此とち遠く天を明く小。曙のほりあ。闘戦剣を
 削るのあり火光小就つちく見とこれ紛へくもあぬ故主と懸敵時夏
 吐嗟と胸且裏死く。走里近づきども。前向小細溝横りて独木の橋ハ
 毀とり早小渡せん樹あふ。ありの小石を搔觸と怒氣充滿る声を
 激一悪人時夏とを。知るや去歳の春忘野も。汝が為は懸てる百姓苗
 四郎が一子。藁二郎。今こ小あ。聊故主小力を勤。共小怒と復
 そと高小呼と。時夏と。敬馬の遠く。刃く。破と打。破
 うち傷らま。怯むをぬると。義邦ハ短鋒を抗。時夏が右よの膽刺

田より阿と苦む声も引せむ傷の株小推著てそが鋒を楚と突捨ぬ
む刀を抜出れ首を丁と打落せば藁二郎ハ歡喜小堪む六尺ありの溝
溝をみ踰て走來り短刀を抜き警敵の軀を刺徹一砍切今今を敵
しと敵い主従か遠く西をみ伏せ親を向なり嗚呼密なる哉
天の応報果せる多人の誠心義邦をばく厄を遠く雙言敵時夏と怒り
人定よその所あり又この藁二郎がぬえハ只是吠鹿の匹夫ぬと大刀あを
べん術を去る敵を征するのるぬどもその孝その義ハ世の人ハ馬と
所ありと遠く下野より來り故主を資け雙言敵時夏が軀を刺て
らば素懐を遂げ彼城戸水草の西勇士と又この吉見主従と知ハ聊具
ちどもこれ彼共ハ同時み且仇敵の爲態畧相似るを奇とぞ若夫
この書を繕く看官その惡報をくみぶく敬言めこの各報ゆるましく

將大時小厄難ありといのちも竟小閑運の域に至らん抑亦さるる間話休題
義邦ハ心ひみ多く藁二郎小再會せその執の大なるをばそのまづる故を
閑小藁二郎ハさう義秀のり又義秀の指揮小よりと篋姫と云るる尼ガ
菴を送り届縁由を告ふく且義邦まもく執びくその義信を賞嘆一と
義秀の義勇ゆるく不思後小虎穴を空くとも篋姫のうやでハつ小と
閑小暇あくる心よかるのさうり吾妹ふさ小再生の幸あるるハ外ある
皆彼人の賜あり一飲人ふさ小滅ありと亦滅ありんや再び朝東ハ力と
勳く寧經仕を滅まじ汝ハ直は菴小のめく復讐の顔末を篋姫はと告
このひみく身を起き折る江三廣光ハさうく賊徒を撃つ棄けく書つた
さく小義邦其知ハ在さるる彼此と索るる又柵外をころろと招
さも取表ハさる義邦ハ廣光小時夏を移し夏之趣又藁二郎が早速の

働たその既略を説示せし廣光ハその首級瓜分てん天小敵の地小喜ハ且高木二
 郎が遠く牙ぬるその忠心を感づく已ま高木郎も亦後ひく別後後状を願ふ
 義邦廣光ハ辞別し尼が替へ赴くゆも廣光ハ時夏が首級小大刀を
 携り主の後の又柵門の進み入る兵火の光が衰へて煙ハ雲と立かる東方を
 程又修羅五郎経任ハ曩小五十六鬼六ホが頻小振小衆
 嬌慢の癖も今ハ光仲を撃と小程あどと城樓を下りて
 奥小赴小婢妾們小酌を執り酒を喫く居り獄舎のとも失火
 婢妾們彼此ハ騒く奔走も経任ハこの報をゆくと此も動
 兵共が埋火の等閑ちりいでた今あつて滅べた驕
 叱鎮めく物もせざる又賊兵ホ注進を失火ハ躬方の謬
 敵も柵中小横行く彼此ハ火を放と猛火四方ハ散乱く滅留

中朝東三郎義秀と名生る猛者ありこの程ゆ義邦を
 獄舎より竊出せり又彼が黨小江三廣光馬標吉嗣忠と名生るもの其武
 勇拔群ハ只是の獄舎のあたる林の中敵の大軍充満く白
 旗を吹麻毛鯨波を揚と攻蒐んと出さる言吉せり言果て
 又外面へ走去ぬ経任これ小醉醒とつくと想像る小吉又實もあはれ誰
 夏の虚実を口をて声さ中呼立と廣度小聚合ハ
 賊徒阿と応り中鶴夜又鴉夜又と喚とる西賊齊一身を起り二の城門
 且立り言状と呼び経任ゆくとて牙を咬とく
 當下鶴夜又額より流汗を振拂ハ叔も彼朝東が火攻の爲体
 弥ちりも小悍れ躬方の大勢這奴只一個小敵を靡され
 碎け死さるもあも目子起とあり壁言ハ餓る獅子暴て百の獸を駈る



義
 秀
 單
 賊
 兵
 戎
 身
 小
 之
 慶
 不
 志

於
 此
 也

卓
 身
 日
 為
 卷
 四

月
 長
 日
 編
 卷
 四

如し誰一人か進むれば血の流るる自を走らし屍を積りて岳をさしり。この人鳴き
語を続んと膝立直し西を推抗け。そのとたごとく柵外小光仲を殺し棄けし。
躬方内外の敵を受く。忽ち地を辟易し初戦の勝利へ再度の敗軍。五十五吠又鬼
六の諸將士既に戦死せり。敵前後より入る火勢も共防禦をす。さればこの御
座をともので火燧を脱る。今おのらかりし如く。同音小報る。経任
安未も眼を睜く。驚嘆し。原来大事及びふ。遮莫義秀光仲又と日れば
敵せんや。踢散る。厨川へ退くと難い。あつてと。鎧を取て裏と投被
五枚兜の緒を締て八角小削か。鐵棍棒を抉る。足音をき。揺れぬ。端近う
牽居る馬小閃りと跨れ。その隊の賊徒三百名前後左右小後ひつ。この城門を推
開れ。咄と嘯と走ら。畢竟経任困を衡し。脱る。不忠。この次の巻小解分る。を令とせん。

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之四 終

